

支援センター名	ふれあいサポートセンター水戸		
所在地	〒310-0054 茨城県水戸市愛宕町4-1		
連絡先	Tel 029-228-1313	Fax 029-228-1633	
	ホームページ http://gakusyu.pref.ibaraki.jp		

事業の概要とポイント

学生ボランティアの活動の場を拡大することを目的とし、教育委員会からのボランティア活動依頼をきっかけに福祉分野における活動の場を新しく開拓した。

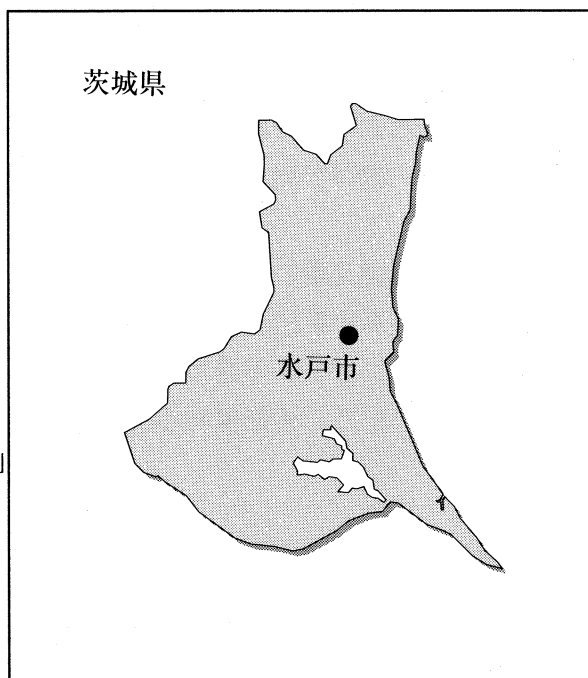
関係した学校・団体の名称

茨城県東茨城郡美野里町教育委員会
 美野里町心身障害児父母の会、県立友部養護学校手をつなぐ親の会
 私立水戸女子高等学校、県立中央高等学校生徒会
 ふれあいサポートセンター水戸登録ボランティア

地域の現況・特色

活動対象地域の美野里町の人口は約25,000人である。美野里町は、標高20～35mの東茨城台地と、これを刻んで形成された巴川、園部川流域の狭い低地からなる。町の名は、美しい野の里の意で、主な産業は畑作を主とする農業地域である。中央を水戸街道（国道6号）が通り、JR常磐線羽鳥駅周辺には工場が進出している。

平成14年11月3日には四季文化会館「みの～れ」が建設された。「住民が主役の文化会館に」と、設計の段階から運営委員として住民が参加し、管理、運営さらには広報活動も担ってきた。また、全国初の試みとして、中学生にホームヘルパー3級資格を取ってもらう試みがスタートしている。



企画から活動までの経緯

- 10月9日 美野里町教育委員会から堅倉幼稚園の家庭教育学級の保育ボランティアの依頼を受ける。
- 10月16日 学生ボランティア5名を紹介する。
- 10月28日 学生ボランティア4名が参加する。
- 10月31日 美野里町心身障害児父母の会の代表の方からサポートセンターへカレー・パーティの活動依頼を受ける。(クリスマス会も同時に依頼)
- 11月1日 学生ボランティアを5名紹介する。
- 11月3日 当日5名活動する。美野里町農材改善センターにおいてコーディネーターも活動に参加するとともに、そこで代表と今後の連携できる体制と協力関係についての打ち合わせをする。
- 11月8日 高校生のボランティア活動を考えるシンポジウムに父母の会代表が参加し、父母の会の活動現状を伝える。
コーディネーターより当日のシンポジストとして水戸女子高等学校教諭を紹介し、インターアクト・クラブの活動の協力を求める。
- 12月14日 学生ボランティア10名紹介する。12月15日当日10名活動する。四季文化館において私立水戸女子高等学校インターアクト・クラブ、地元県立中央高等学校の生徒も参加する。
- 12月21日 県立中央高等学校の生徒会長が水戸生涯学習センターボランティアに登録する。

事例の展開内容

- ・幼稚園家庭教育学級の親子体操教室に保育ボランティアとして学生を派遣した。学生ボランティアは、親が欠席の園児や園児の弟妹たちと一緒に体操をした。
- ・町の心身障害児父母の会主催のカレー・パーティに学生ボランティアを派遣した。学生たちはカレー作りの手伝いや、子どもたちとボール遊びを行った。父母の会の方は集会等の開催時にボランティアの協力が欲しいと話していた。そこで、今後の「ふれあいサポートセンター水戸」と「美野里町心身障害児父母の会」との連携・協力関係について話し合った。
- ・本行事への協力依頼を受けた際に、コーディネーターより同会の代表に『高校生のボランティアを考えるシンポジウム』の開催を案内し、代表の方の参加を頂いた。シンポジウムの中で、「『父母の会』開催時にはボランティアの協力をぜひいただきたい。」と、会の現状が伝えられるとともに、協力を要請された。シンポジストの一人であった水戸女子高等学校インターアクト・クラブ顧問に、活動の協力をお願いした。

- ・父母の会主催のクリスマス・パーティーには、「ふれあいサポートセンター」、水戸女子高等学校、地元の県立中央高等学校など多くの学生ボランティアが参加し盛り上がった。参加者全員で会食をし、一緒にゲームを楽しむことができ、学生同士の交流の場となった。後日、水戸生涯学習センターの学生の活動に興味を持った中央高等学校の生徒が、センターを訪れ、ボランティア登録をした。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

学生のボランティアが、協力依頼をされた時に、「サポートセンター水戸」に連絡してくれたことで、ボランティアの活動の場がさらに広がり、新たなコーディネートができた。そして情報を必要とする人への情報提供もできた。

一つのボランティア活動で得た情報がサポートセンターに入ることにより、ボランティアを必要とする方々とボランティアを希望する人の新たな交流活動の場が形成された。サポートセンターにコーディネートを直接依頼される形よりも、ボランティア活動の中での出会いをもとに広がりをもてた好例であった。

評 価

かかわった人たちがすべて意欲的であったために活動や交流の場ができ、情報提供もできた。コーディネーターも活動の場に出向くことで、より多くの情報を得られることがわかった。今後、活動する人や現場の活動状況を把握することによって更なる場の開拓をしていきたい。

注：インターアクト・クラブ

主に高校生（年齢14歳から18歳）を中心として、それぞれの地域のロータリークラブをホストとし、主に地域社会奉仕・国際理解を目標に活動を行なっているクラブのこと。